

〈研究主題〉 児童生徒の学びをつなぐ授業づくり
～児童生徒の「思い」や「願い」を踏まえて（1年次/2年計画）～

本研究では、児童生徒一人一人の「思い」や「願い」を踏まえ、教科等の視点から「何を学ぶか」を整理し、学習評価の視点から「何ができるようになるか」を明確にして、児童生徒の学びをつなぐ授業づくりに取り組んでいます。今回は、小学部の全校授業研究会について紹介します。

● ● ● 小学部4・5年 生活単元学習
「屋台だ！わっしょい！②～小学部のみなさん！いらっしょい！」

授業について

「射的」と「金魚すくい」の屋台の開店を目指し、お客さんに楽しんでもらえるように開店準備や接客練習を行っている。本時は各屋台の看板の制作を行った。

抽出児童Aについて

- ・自分の世界に入ると全体指示を聞くことや、言葉だけの指示を理解することが難しい。
- ・一人遊びを好むが、友達の誘いを受け入れたり、簡単なやり取りをしたりして遊ぶことがある。
- ・繰り返し取り組むことで見通しをもち、準備物や手順などに気付いて進めることができるようになってきている。



授業研究会から

授業研究会では、参観者が見取った抽出児童の言動を基に、互いの解釈を共有し合って、「次につながるキーワード」をまとめます。また、授業全体を通して学びをつなぐために有効だった手立てと、今後の授業等につなぐ意見交換を行います。

※以下各グループのワークショップからの抜粋

○「次につながるキーワード」

- ・全員で目指すゴールの強調（何のために・誰のために）
- ・友達とやりとりするためのTの言葉の精選

○「学びをつなぐために有効だった手立てと今後の授業につなぐキーワード」

- ・動画の活用（視覚的、聴覚的に有効なもの）
- ・相手の様子を見ながら活動できるペアリング



【指導助言】 秋田県総合教育センター支援チーム 指導主事 長崎 雪子氏

○授業全体について

- ・授業の始まりの掛け声、屋台の模型、大きく鮮やかな看板など、学習への期待をもつ仕掛けがたくさん見られた。
- ・招待するお客さんが喜んでくれることを目指して、丁寧に取り組んでいる様子が見られた。
- ・子どもたちが主体的に活動するための教材・教具の工夫が細やかになされており、視覚的な支援を手掛かりに児童が自ら考える場面があった。
- ・子どもたちは、友達との関わりについてどのように思い、願っているのか。「〇〇さんと話したい」のように、自然な形で関わることができるとよい。社会に出てから人と関わり合う豊かな生活へつながるように、小学部、中学部、高等部と積み重ねてほしい。

○学部研究について

- ・単元構想の話合いや抽出児童の見取り、授業改善、学びのつながりを見つけるなど、学部全体で取り組もうとする意識が高いと感じた。今後も複数の目で見取ったことを丁寧に分析し、整理することでよりよい授業改善を期待する。

○今後に向けて

- ・学校でできるようになったことや身に付いたスキルが、実生活や職場で通用するよう汎化させるためには、児童が自ら行おうとする内面の動きを大切にする指導や支援が大切になる。
- ・子どもを主語に、子どもにとって必要性があるかという視点で、改めて学習活動の一つ一つを検討すると、新たな気付きがあるのではないか。関わりを例に挙げると、子どもから友達に話し掛けたい状況をつくることも支援の一つになる。社会に出てから子ども自身が自ら関わろうとする姿を目指すには、現段階ではどのような指導や支援が必要なのかを考えることが大事。他の活動についても同様である。将来の生活への汎化を目指した「学びをつなぐ」支援の考え方の一つとして検討いただきたい。

授業研究会後の授業から（授業へのフィードバックと児童の変容）

○友達とやりとりする経験と、相手の様子を見ながら活動できるペアリング

教師の支援を減らし、児童の力で進められるよう見守った。屋台の準備の際、同じグループの友達が気付いて準備し始めると、Aも急いで準備に加わるようになった。グループの友達と役割分担をして準備を進めるやり方が定着し、友達が読み上げるチェックリストの項目を集中して聞き、準備も手早くなった。屋台では、Aの役割を「景品を取ったらベルを鳴らす」と具体化、明確化することで、お客さんの動きに注目できるようになった。更に、取った景品を見てAがすぐに「(景品を) お願いします」と伝えられるようになった。また、お客さんへのルール説明の仕方を改善していく中で、友達が演示すると、その場で理解し、「こちらです」という言葉と手を差し出すジェスチャーをタイミングよく話せるようになった。最後の振り返りでは、友達が「声が大きかった、みんなよかった」とグループの仲間を褒め、それを聞いて笑顔になった。



休み時間、Aが自分から「○○さん、○○さん、昼休み、走ろう（鬼ごっこしよう）」と誘うようになるなど、友達の様子を気にする発言や、関わろうとする姿勢が育ってきている。

○ゴールを設定し、繰り返し取り組む経験

小学部の友達を、計4回、屋台に招待した。開店に向けて、毎回、自分の「頑張りポイント」を決めた。友達が頑張りポイントを決め、発表する姿を見て、Aも接客練習の中で受けたアドバイスから、「(景品を) 両手で渡す」と目標を話すことができた。開店時には、自分から「どうぞ。ありがとうございました。」と両手で景品を手渡した。動画を活用した振り返りでは、自分の接客の様子を見て「両手で渡した」とうれしそうに話した。また、お客さんがその場から立ち去ってしまう様子を動画を見て「どうすればいいかな」という問いから、「少々お待ちくださいと言う」という目標を考えた。実際の場面では、お客さんの名前を呼び掛けた後、手の動きを添え「少々お待ちください」と話した。



繰り返し取り組む中で、次に何を頑張ればよいのか考え、実際に気を付けて取り組み、それが友達や教師に認められる喜びを感じ取っていた。